

神風特別攻撃隊

昭和二十年八月十五日の敗戦を、私は千葉県の館山で迎えた。八月のはじめから、「アメリカようそろ」という映画のロケーション撮影で館山の旅館に泊まっていたのである。

「ようそろ」というのは海軍用語で、「まっすぐ」、つまり「アメリカへまっしぐら」という意味である。敗戦後のどきどきまぎれで失ったのか、私の手もとに脚本もなく、ストーリーもよくおぼえていないが、航空基地付近に住む海軍軍人の未亡人と娘の物語で、未亡人が亡き夫の追善供養として、広い屋敷を航空隊員たちの仮の宿として開放する。やがて娘は一人の若い隊員に好意を寄せ、二人はほのかな恋を語りあうようになる。が、その青年将校は「海軍特別攻撃隊員」であった。

「神風特攻隊」というのは、いまの若い人たちにはピンとこないだろうが、戦争も終局に近い十九年の終わりのころから、重量制限一杯の爆弾と、目的地まで、つまり片道だけのガソリンを積んで、飛行機ごと、自らが爆弾となって、敵の軍艦や航空母艦に体当たりをくらわせるという、壮絶な特別任務をおびた隊であった。

十九年十月二十五日、当時二十三歳であった「関行男大尉」が、特攻第一号として出撃して以来、神風特攻機は続々と出立して、南の空に散った。新聞やニュース映画で見る特攻隊員たちの姿は、日の丸の鉢巻きをしめ、飛行服の胸もとには必ず純白の絹のマフラーをのぞかせていた。指令を受けて飛び立ったら最後、万が一にも生還することのない彼らにとって、真っ白い絹のマフラーは、いったい何を意味していたのだろうか？ 自ら、若い命を絶つことへの、たむけの死に装束のつもりだったのか、それとも、絹のマフラーを巻くことによって自分が特攻隊員である、という覚悟をイヤが上にも納得づけるためだったのか。私には、いまだにあのマフラーの白さが痛いほど網膜に焼きついていて忘れることが出来ない――。

映画「アメリカようそろ」の青年将校は、娘への恋情がつのればつるほど、自分が「特攻隊員」であることを打ち明けることが出来なくなる、というより、特攻隊員だと口外することは軍規に反することであった。そして、いよいよ出撃というその前夜、彼は「じゃ、また明日」というたった一言の言葉を残して、娘と最初で最後の握手を交わし、翌朝未明に、白いマフラーをなびかせながらたった一人で海に向かって飛び立って征く。そんなストーリーだったと思う。演出は山本嘉次郎。未亡人には入江たか子、娘

には私、高峰秀子、そして青年将校には、劇団前進座の市川扇升が扮していた。

昭和二十年に入ると、日本列島の空には、サイパン島を基地とするアメリカ航空隊、B 29の執拗な波状攻撃が、日夜を分かつたず、文字通り寄せては返す波のように現れては消えた。空襲警報の不気味なサイレンが、ポオーツ、ポオーツ、と鳴りひびくと、人々はすべての作業を打ち切って、防空頭巾をかぶり、貴重品の入ったズダ袋を肩から斜めにかけて、最寄りの防空壕に飛び込む。暗い穴の中にしゃがみこんで、ただ、じっと時の過ぎてゆくのを待つ。いま、この瞬間にも、何がどう起こるか、一秒先のことも分からぬその不安と焦燥感……。

そして空襲警報解除のサイレンが鳴ると同時に、緊張に疲れ果てた神経をブラ下げたまま、モゾモゾとモグラのように穴から這い出す、そのカッコの悪さ……。 「やれ、助かった」という安堵感よりも、なぜか妙に屈辱感が先に立った。

蒲田が焼け、横浜が焼け、宇都宮が焼け、大阪が焼け、そして再び東京が焼けるころには、爆撃で身内を失い、または焼け出されて身ひとつになった罹災者たちへのてまえもあってか、もう「自分の家だけは焼けないでほしい」という気持ちなどどうでもよくなって、勝手にしゃがれと道の真ん中に大の字になってしまっていた。不貞くされたチンピラやくざが「さア、殺せ……」と居なおるにも似た、ヤケのヤンパチである。そんな日々が、いったい何日続いたことだろう。私の出演映画も、皇軍慰問用として

戦地へ送られる「勝利の日まで」、そして女子通信兵をテーマにした「北の三人」など、徹頭徹尾、戦争に明け、戦争に暮れる毎日だった。「アメリカようそろ」の撮影に入っただのは七月末であった。

「この空襲のさなかに、館山へ行くなんて無茶だ」

「アメリカは航空基地を爆撃するに決まっている」

「日本の空は、神風特攻隊が守ってくれるのではないか、なにも恐れることはない」

私の周りでは、カンカンガクガクと意見が交わされた。が、私自身は、先に書いたように「もう、どうでもいい」という心境であった。空飛ぶ大鮫のようなB 29から見れば虫けらのような存在の人間なんか、今更どうあがいたってどうなるものでもなく、運を天にまかせるよりほかはない、と思っていた。

ロケ隊は出発した。男たちは国民服にゲートル姿、私たち女はモンペの上下に防空頭巾であった。

汽車の窓から見る千葉の海は青く美しかった。宿に落ち着き、遅い夕飯を終えるころ、日が暮れた。と、いきなり空襲警報のサイレンがうなり出した。ビックリしたなア、もう、である。館山最初の空襲であった。館山だけは大丈夫、とタカをくくっていた撮影隊は不意をつかれてバッタのように飛び上がり、各自の部屋から転がり出た。

下駄とぞうりを片方ずつ履いている者、なぜか座ぶとんを一枚抱えている者、裸の上半身に上着をひっかけながら走る者、みんな眼の色が変わっていた。館山に住む人たちも、ここばかりは安全と信じていたせい、宿の庭に掘られた防空壕もほんの形ばかりで心細い限りだった。満員スシ詰めになった防空壕の中でだれかが叫んだ。

「えれえとこへ来ちゃったな、こりゃ」

「明日あしたっから来るぞ、この分じゃ」

しかし、約束が違うからといって東京へ引き返すわけにはゆかない。撮影はスケジュール通りに翌朝から開始された。

ロケ現場の海岸は見渡す限りの砂浜で、掘っ立て小屋ひとつなく、空襲を受けても逃げ込む場所がない。砂浜のあちこちに「たこ壺」と呼ばれる一人用の防空壕が点々と掘られた。屋根もなく、人間一人がやっとしゃがめるほどのただの穴である。穴掘り作業が終わって、カメラが据えられ、テストがはじまった。とたんにサイレンが鳴り響いた。「来たーッ！」

テキは、水平線のかなたから真夏の太陽に銀翼をきらめかせながら近づいてきた。晴れ渡った青空に星のかたまりを見るようである。ゴーというB29の爆音に、キューンというような鋭い音がまじっている。それはおびただしい数の艦載機であった。

ロケ隊は、クモの子のように八方に散り、走りに走ってタコ壺に飛びこんだ。爆音が

遠ざかると穴からニョキニョキと首が生え、再びカメラが据えられて撮影がはじまろうとすると、また、海から湧き出すように星の編隊である。

駆け出す。飛び込む。飛び出す。駆け出す。大海原を背景に、まるで集団鬼ゴッコである。空襲警報がたて続けに鳴る、というよりも、こうなってはサイレン係も、もはや收拾がつかないだろう。そんなことはどうでもいい。砂浜なんかで狙い撃ちをされたらたまったものではない、といって、宿へ戻れば安全というわけでもない。頼りない防空壕の中で息をひそめているよりは、砂浜を駆けずりまわっているほうが、まだマシかもしれない。アメリカへまっしぐら」どころか、まっしぐらに来たのはアメリカのB29だったのである。

撮影は空襲で寸断されて、少しもはかどらなかつた。ロケ現場へ出発する前にサイレンが鳴ると、宿で足どめをくったまま一日過ぎてしまうこともあった。街なかに侵入した艦載機はところかまわず機銃掃射を浴びせかけた。どこにいても一日中、防空壕へ入ったり出たりの日日にほとほとイヤ気がさした私は、ある日、サイレンが鳴り続ける宿の二階の廊下に立って空を眺めていた。

遠くに、ズシーン！ とB29が落とす爆弾の音が響き、艦載機が鋭い金属音を立てて、人家の屋根スレスレまで急降下をくり返す、そのたびにバリバリバリと機関銃の音がして、あたり一面はモウモウたる硝煙に包まれ、火薬の匂いが鼻を刺す。遠くにガラス

が割れる音、近くに瓦屋根が撃ち抜かれる音。私の目の前で、空中戦が展開された。パッ！と赤い炎を噴いて落ちたのは、アメリカの艦載機だろうか？ それとも零戦と呼ばれる日本の戦闘機だろうか？ 私の頭の中はまるで映画でも見るように冷静だったが、体のほうはさすがに金しばりにあったようにすくんでいた。館山は間違いなく「戦場」であった。

その日は、午前中にサイレンが鳴ったきりで、午後は珍しく爆音が途絶えた。が、いつ何時、またラジオのブザーが鳴り、「東部軍管区情報……敵機、約二百機、房総半島沖より本土に向かって接近しつつあり。警戒警報発令……」と、アナウンスがあるかも知れぬ。

撮影隊六十人余はロケーション撮影に出るに出不れず、待機の姿勢で宿の中でブラブラしていた。映画の仕事に限ったことではないが、映画を撮っていないときの映画人ほどしまりがなく間のぬけた存在はない。「ロケ隊殺すに刃ものは要らぬ、雨の三日も降ればよい」といわれるほどで、長雨に降りこめられれば「お天気祭り」と称してゲーム大会をしたり、酒宴を開いたりしてうき晴らしもできようが、明日は空襲がないようにと願いをかけてドンチャン騒ぎをするわけにもいかない。

ほとんどロケ隊だけの貸し切りになっている宿の中はひっそりとして気味の悪いほど静かであった。私もメイクアップだけして、和服の衣裳はつけず、自前のふだん着のま



「勝利の日まで」(昭和20年、東宝)の古川緑波(左)、徳川夢声(右)と

ま庭に面した縁側に腰をかけて、今日も美しく晴れ渡った紺碧の空をぼんやりと眺めていた。

ふっと気がつくくと、白いハンチングにスポーツシャツ姿の山本嘉次郎がうしろに立っていた。彼は「ドッコイショ」と、小さく声を発しながら、私と並んで廊下に腰を下ろした。

「デコ、一人で、何を考えていた？」

「別に、なんにも……」

「デコ、つまんないかい？」

「つまんない」

「そうかなア……例えばサ、ホラ、あの松の木を見てごらん、なぜこっちへ向かって曲がっているんだと思う？」

「？」

「たぶん、海のほうから風が吹くんで自然

に曲がっちゃったんだよね」

「……」

「普通の人でもタクワンは臭いと思うだろう？ でも俳優は普通の人のお二倍も三倍も臭いと感じなきゃダメなんだな」

「……」

「なんでもいいから興味を持って見てもらえん。なぜだろう？ どうしてだろう？ て……。考えるっていうのはワリと間が持つよ。そうすると世の中そんなつまんなくもないよ」

山本嘉次郎はそれだけ言うと、またヒョイと立ち上がって行ってしまった。私は庭をみつめたまま、ポカンと座っていた。私は、山本嘉次郎の残していった言葉を反芻していた。やがて、火の玉のように熱い「恥」が、ゆっくりと私の喉もとへ這い上がってきた。思えば十三歳で東宝映画へ入社して以来八年余、私は年間六本から八本の映画の全作品に全力投球をしてきたわけではなかった。中には「こんなもの……」と、気の進まない仕事もあった。そんなとき、私は適当に手を抜いた。それは、まだ西も東も分かっちゃいない、若さだけが売りもののチンピラ女優、私の思いあがりであった。なまじ人気があるだけに、私には親身になって忠告してくれたら、ブレーキをかけてくれたりする知人や友人はいなかった。

山本嘉次郎にとって、私の日々が退屈しようとして、しまいと、全くカンケイのないことである。松の木やタクワンの話にかこつけて、彼が私に言いたかったのは、どうせ役者になるなら「プロになれ」という一言だったのだ。私がプロになろうとなるまいと、それも山本嘉次郎個人にとっては一文の得にもならぬ、カンケイないことであった。それなら「プロになれ」という言葉は山本嘉次郎のいったどこから出たのだろうか？ それは、私という人間に対する親切、思いやり、人間的な愛情にほかならない。私は素直に、ありがたいと思った。

私の心の中には依然として役者稼業に徹し切れない部分が、尾^{びてい}骨のように頑固にくっついていて。いや、正直に言えば、私自身が役者をしていくくせに、どこかで役者稼業を見下している部分があった、というほうが当たっているかもしれない。「どうせ演るなら、他人よりうまく演ろう」という気持ちはあったが、役者として悩んだことはない。馴れることに馴れすぎ、勉強を怠った自分が、心から恥ずかしかった。「好きも嫌いも仕事と割り切って、演る以上はプロに徹しよう。持てない興味もつとめて持とう。人間嫌いを返上して、もっと人間を知ろう。タクワンの臭みを、他人の五倍十倍に感じようになろう」

私の眼からウロコが落ちた。それから三十年、曲がりなりにも役者の道を歩み続けて五十歳になったいま、あのとときの山本嘉次郎の言葉がなかったら、いったい私はどうな

っていただろう、と慄然とする。私が「プロに徹しよう」と決心した日から何日か経った、八月八日の朝刊の第一面に、「広島に、アメリカの新型爆弾投下さる」という初号活字の記事がのった。ピカッと白い光が走ったとたん、広島の上に巨大なキノコ雲が広がり、一瞬にして二十万人余の生命が消えたという。続いて九日、再び長崎にも新型爆弾が投下された。

八月十五日。私たち俳優は、東宝からの応援の踊り子や楽団を迎えて、館山航空隊、洲崎航空隊の隊員たちを慰問した。「館空」の、飛行機の格納庫で歌ったり踊ったりした慰問団は、ステージ衣裳のまま軍のトラックで「洲の空」に運ばれた。

天皇陛下のラジオ放送があったのは、「洲の空」の慰問が終わった直後の正十二時だった。広い飛行場に据えられた一つのラジオを前にして、全航空隊員が整列し、私たち慰問団もそのうしろに並んだ。ラジオから流れ出す天皇陛下の声は、パイパイ、ガアガアという雑音にまぎれ、一言も聞きとることができない。ジリジリと照りつける太陽の下で、直立不動の姿勢で全身を耳にしている航空隊員たちは、あっちで一人、こっちで二人と卒倒した。いずれも十七歳から二十歳くらいの若者である。二十分や三十分ぐらい炎天下に立っていてもビクともしないはずの年齢ではないか。その若者たちがつぎつぎとくず折れるようにアスファルトの上にノビてしまうということに私はビククリし、日ごろの猛訓練が心身ともに若者たちの限界にきたのではないかと哀れに思った。

天皇陛下の放送が終わり、ラジオのスイッチが切られたとたん、一人の将校が台の上へ飛び上がった。そして叫んだ。

「という次第であるから、われわれ軍、官民はア、いっそう心をひとつにして、必勝の精神を固めなければならぬ。分かったか！」

というような演説をした。なにがなにやらチンパンカンパンのまま、私たち慰問団は昼食をご馳走になり、のんびり記念写真など写して、暑い盛りの午後二時、帰途についた。航空隊前の広い道に待機させていたトラックにたどりつくつかないうちに、後ろから「オーイ！ オーイ！」と叫ぶ声をして一台の自転車が走って来た。帽子なしの軍服にスリッパをつっかけた、乱れた姿の将校だった。私たちに追いついた将校は自転車を放り出すと、目をむいて叫んだ。「負けたんだ、負けたんだ、日本は無条件降伏だ！」

「?!」

私たちは半信半疑のままトラックに乗った。宿の玄関さきへ一歩入ったとたん、私の眼にとびこんだのは、玄関のホールにベッタリと座り込んだ何十人かのロケ隊の姿であった。私たちを迎えた、そのノロノロとした力のない眼差しを見たとき、私はようやく「敗戦」を納得したのである。何をどう考えていいのか、嬉しいのか、悲しいのか、口惜しいのか、さっぱり分からない。ただ「戦争が……終わった。……戦争が……終わったのだ」と、まだ実感の湧かない言葉を心の中でくりかえすばかりだった。

玄関さきの電話口には、ロケ隊のロケーション・マネジャーがしがみつぎ、大声で東京の撮影所と連絡をとっていた。「はい……撮影は中止……明朝ひきあげます、時間は追って電話を入れます、バスの手配、たのみます……」

夕暮れ。館山の街は物情騒然としていた。耳をツン裂くような爆音を立てて、宿の屋根スレスレに飛び交う飛行機から、「徹底抗戦、われわれは死ぬまで闘ふ！」と書かれた、インクの匂いも生々しいガリ版刷りのピラが紙吹雪のように撒かれ、宿の庭には、つい今朝までは明るい笑顔で挙手の礼もすがしかった顔見知りの甲板士官や将校たちが、酒気を帯び、抜き身の日本刀を振りかざしてなだれ込んで来た。ランニングシャツ一枚の彼らの眼は赤く血走り、「エイッ、ヤーアッ！」と鋭い叫び声をあげながら、庭の木々をめった打ちに斬りまくった。池を囲んで美しく配置された木は、あるいはゴソリと音を立て、あるいは音もなく土の上に倒れた。その光景は、むしろ空襲や空中戦よりも、私には恐ろしい見ものだった。その騒ぎがようやく収まったころ、寝間着に着替えた私は蚊帳の中へ入った。昨夜まで、暑くても雨戸をたて、電灯に黒い覆いをかけて寝たのに、今夜はあちこちの部屋にあかあかと電灯がつき、まるで見違えるような光景だった。

「明日から、どうなるのだろう……」

考えても仕方のないことを、私はうつらうつらとしながら考え、いつか眠っていた。再びキーンッ！ という飛行機の爆音に、私はビクッリして飛び起きた。時計は十二時をまわっていた。飛行機の轟音はあとからあとから、宿の真上をひっきりなしに通り返り、海の方へ消えていった。

「戦争は終わったというのに……なんのために？……」

私の脳裡に、夕方、吹雪のように空から降ってきたピラの文句が思い浮かんだ。「徹底抗戦、われわれは死ぬまで闘ふ！」

闘うことのみ教育され、闘って死ぬことだけをたたき込まれて突然、闘う相手を失った若い彼らのやり場のない絶望感は、「自爆」によってしめくくりをするよりほかになかったのか。飛行機の腹に何本の爆弾を抱えて飛び立ったか知らないけれど、零戦に積まれる燃料の量はしれている。果てしなく続く暗い海の上を飛び続けて、いつかガソリンの最後の一滴が切れたとき、そこが彼らの墓場になるのだ。……私はいても立ってもいられない気持ちだった。

「戦争は終わったのに……」

屋根の上を通りすぎてゆく爆音を聞きながら、私はただ呆然と、蚊帳の中で膝を揃えて座っていた。